

5 4 3 2 1 0

5 4 3 2 1 0

5 4 3 2 1 0

5 4 3 2 1 0

5 4 3 2 1 0

5 4 3 2 1 0

5 4 3 2 1 0

5 4 3 2 1 0

5 4 3 2 1 0

5 4 3 2 1 0

5 4 3 2 1 0

5 4 3 2 1 0

5 4 3 2 1 0

5 4 3 2 1 0

5 4 3 2 1 0

5 4 3 2 1 0

5 4 3 2 1 0

5 4 3 2 1 0

5 4 3 2 1 0

5 4 3 2 1 0

5 4 3 2 1 0

5 4 3 2 1 0

5 4 3 2 1 0

5 4 3 2 1 0

5 4 3 2 1 0

5 4 3 2 1 0

5 4 3 2 1 0

5 4 3 2 1 0

5 4 3 2 1 0

5 4 3 2 1 0

5 4 3 2 1 0

5 4 3 2 1 0

5 4 3 2 1 0

5 4 3 2 1 0

5 4 3 2 1 0

5 4 3 2 1 0

5 4 3 2 1 0

5 4 3 2 1 0

5 4 3 2 1 0

5 4 3 2 1 0

5 4 3 2 1 0

5 4 3 2 1 0

5 4 3 2 1 0

5 4 3 2 1 0

5 4 3 2 1 0

5 4 3 2 1 0

5 4 3 2 1 0

5 4 3 2 1 0

5 4 3 2 1 0

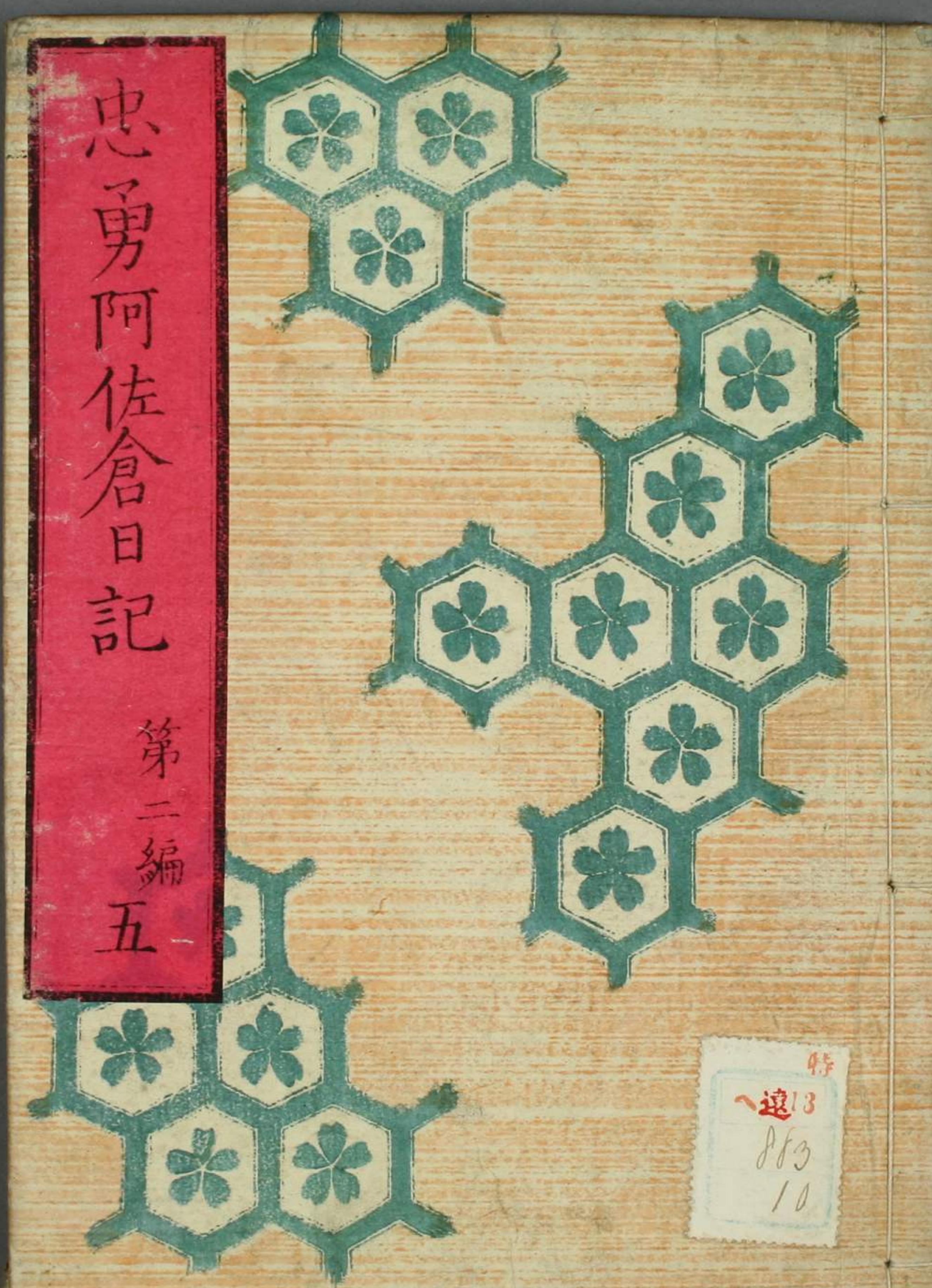
5 4 3 2 1 0

5 4 3 2 1 0

5 4 3 2 1 0

忠勇阿佐倉日記 第二編五

5 4 3 2 1 0



JAPAN

Tessma

0 1 2 3 4 5

忠勇阿左倉日記第二編卷之五

東都 松亭金水編次

明治三八年十一月廿四日晴

毒婦の奸智巨害と招く

第九回

悔謀衰へば忠臣と摧く

却説太閤董辰太とあとの知縣等とり入らせ。の郷の長老たちをして結びて此如ふ詮めあらば長とりひ老人あり必ずあと始めう。す他の莊屋等ゆうちすり。ちうそすり。愁訴てえさんあぬ。彼経験とりひ挂て。住意の詰ハ賤被とす。農民アミス。ちうそ。難散ふ及ぶとも。這田の用途調べ。功めありと計較。軽く委ねまつて石筋。く。篠竹半ハ乾しき。又より五六日の日数を待て。更に愁訴の工みけまづ董辰。さあ。さう。太の案ふお遠一き。再びも残か。この計策の拙きを教ど。愁訴做へうべ。其

門 遠
883
卷 10

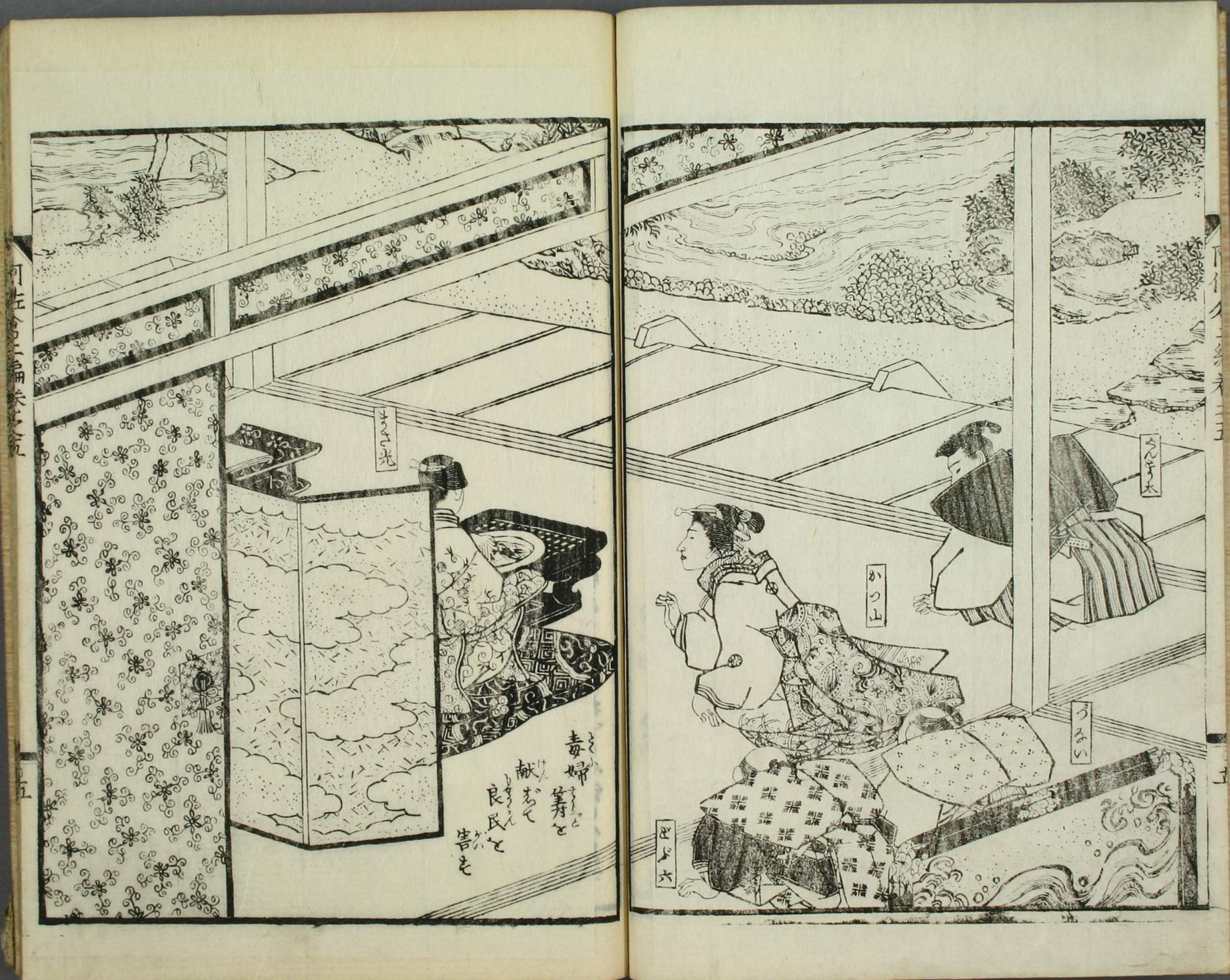
麥の所をもあらんと名ひ。まづお動静を國ると見えり。すと上長と互教
らまでも程近き出外があげ。渠もひ易くぞめり。まづ花路よりてゆふ。ま
づ安閑とあてやうある。この針策奈何といふ。畦里硝平一客ふこまきを考
けり。とひみぞ。董後太の廟も。准候をかて盡を盡つて。怪しき日。董の程小禁示
め。むけた罪科の囚人を牽引してみをとど出立。花路こそぞ帰る。然らぬ下
當官が渾家。於千代の日夜歎きまで。との程の良人。と美濃伊勢のかく入
れ。今こまほ縷ひつね。かくふ在り。ばまとての御放ふあり。せん
と。思ふ阿翁も妹の初も。縁付ひよべ手許か辱。千秋の児の妻市。男す
の意願みど。この年僅か八歳。二男の六歳の妻也。千秋の妻也。され
ばく三歳。いまだ膝が離れぬ。この二個の児と頼す。一個當守を。

任一さ松持。この頃まぐく小奴ふ婢女と。六七個まで。あまうと。既ふ山林田
を。ひそか。そ年一。さと。あり。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。
畠。健手ふ。通手時宜す。り。在て。要する人共う。人召は。す。とある。と。ひ
ちえ。まと。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。
加縣の。まえ。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。
一。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。
あま。泰山。山城。大東。ひか縣。み居らば。在治の。醸吏。董後太。が。牽り。と。ひと
ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。
用。す。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。
あま。あま。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。
と。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。ひと。
よき。例の虚言。う。と。半信せば。あり。け。と。徳。あ。ぬ。人の。風。ま。よ。寝。ひ
て。ゆ。ほ。せん。と。帰。ま。う。と。二。三。日。と。陶。く。窓。ふ。探。う。帰。ま。う。と。み。月。ま。の。傍。

下卷

トセ
はと時第どどひ拂らぬ居らま。心懶りぬ生をめ身と碑。故人へき
もえん な
も版と做をと。恩と報うの縁より。諒て多く老職の安東隼人あらへ
らうまく。あとうとと
貴の君の稚をより。ちやうとて私を。賢者ふあうと人の嘆。支あみこを室
まちけ
町家より。ひ私美あうて例より北ふふ茅と賜ひ是ふ居らまよ。今
ひち いとこ の。えとうど。
とくび せき とき うきりかく。えき
よう密小花を落へ登る。安東刀称ふ這面のちと。具ふ訴へ一郷のわ麼のよと
まと
言ひ。泰山刀穂のまよと。との阿佐倉の人の幸ひとあるとあん。箇
くわふとう。あ も
ち
様のとく。吾一個。もひ空を。做をふ。名ト。他不商議。まよゆく。郊て彼昌淳
ちゆう。
じゆ
蹠候。あらかづくと方すと究め。その日の事とて。少一がくの資金
あまび。とまこと路用と懷み。兄と二男の森せうりて。竹槍の下へ。手の遺書を始
み
みえん まくまくらう。ちのこじ
めあたる。三男を養ふ。まき乳欣児のうめく。迹ふ遠をり便り。と肌ふ

まをあても精收あんといもざうい類ひりあくぬを言ひり。故てきづ上ふまで。
ひと 一 さ
人と格擇するあまふまの老え化せしとて一郷奉て丘ふ地す。まう改
ちます。
と豊とて残る放きの根性と燒きこまへあるくびふど威一様を奏積
みさめり。あらそへ
きど。老をあらひ面も変せば。その面替へ一姫嫁ふとも變て言ふよ。かの
みわ わぐへ
三個の倭人どり。元来極刑の者多くわが子爵若と云ふ小忍びに今ハ御業儀
をそ
果て。愁祚不寧考へ。如何せんと一夜まこと正光不言けり。是より信
あうそ
とせ思案もあひ。うち棄トあひ。勝山通えを言ひ。此方の多岐翻訳で
ああへ
愁祚ざふま。考え。捨て物ふ似る老耄。終て遠んの姿けよどり。それで
あうそ
君の威を失ふ似る。さとびとて刑罰ふ以て見えあらすの罪を。ま速か毒氣を殺
まくわ
い。病死してまどもの戸を稟把ふ未生よと達しき。下へう傳候き來まえ。



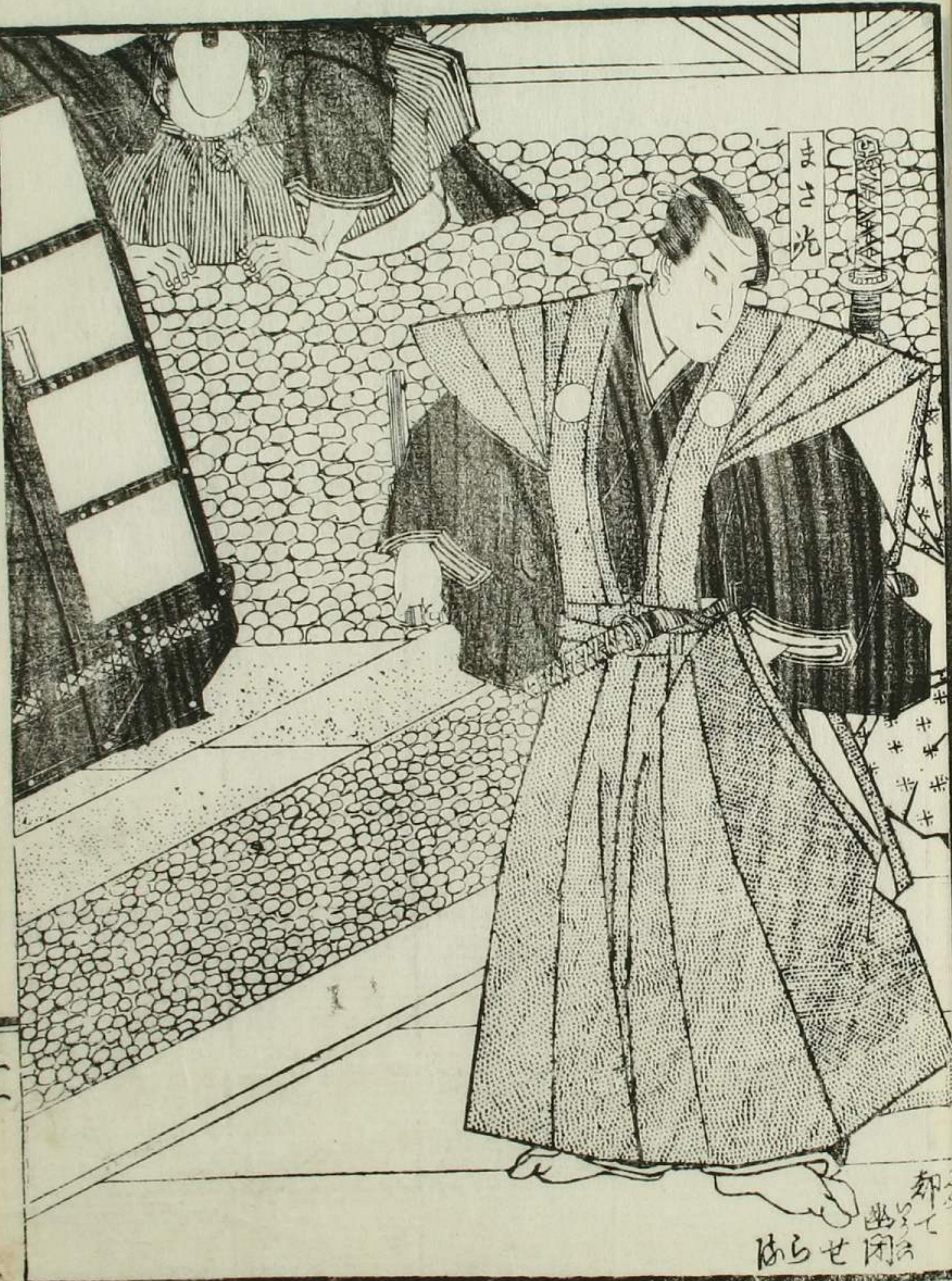
然あらずをと等と引捕へはめりて、長とのひ年老うる身の面接らましと。おうと
愁訴ゆかずでるや。然ぞうは處の公より上の命小ゆ従ひて人面獸心の鳥滝
のもの。お罪と乳さんおとこび怒すゆくと云ふ必畏忌とて、用途と謂を甚と
陪礼さん。この儀ゆふとりとて、夜ふ光りくの考へゆ。今勝ひづひくと計
らとあつまひ。三個の板小領差し。他への醫師小命トテ毒薬と調合させ
よひうち ちうえ こす。あす つとも りち
夜密小番人小遣ふ取て早天て用うべ。と歎ぶりひづらう。爰不まと安東隼
しのちや えんよ そづら
今先頭満坐で厚をあまき开と奴るとあらあづま。僕人乃不撲てて、君と
くわう くわく
萬一人と經ゆ。と老職かゆと久じ。勢ひぬ何とも走きすう。強て練め
よひうち
後竟み死とぞ做すの代へ。任意卒とも厭ふ是ら私ど比干仙子足骨づ葉く
れり。わざりうごくまあ、あよ
死せも。村王吳王恩と改めどす。と世ふ不物なき。あれとぞ計らと集ら

真忠ちうふ丸あまざのれ象あまび是う漫に出候せを。引は革下す
あらひま。腰公うる者ふひ食めと差り。鐵お婢あが密お告よと示一あけを。
ち あやじと事するのすま と
夢ふ少程頃内へ課役のうを阿佐倉のやの長と因人のやふ做とねて来うと
えり
彼若ちう告げよと要こそあらやと密密小婢のやうと窺ふ。以の外うる那とれ
ば革人ひ大ふうち残さ。とお容ひ小ゆみかと。お家のお亡お挂るとこれ捨
あくべと不當ふあるを。頗歎て殊め矣。とお人あらうと。併人等お拒ままで婢
と。きこひまちや そぞく そぞく
遂ト君宮中へ出仕の刻限持ありて計らと思惟を衣服と改め。時と辰の
えき
半刻あまと。今ぞ出仕の刻さんと北山の茅とちか葉裏を單め。毛油の小
ぢゆき
落へゆて寝る。お玄関みの主君の供人大方拂ひ。毛色あまびお着きけり
えき
と軟びてすむも門外を下衆す。玄関へうち至り。今朝君へ來ふをあぐへき

すうえん。そく これん。じゆ お。ふせん
ちて勧むる托宴悉くもひかせと失ひゆへ御めく不善とまきり發
あきこ。末左右小侍するのに不善と觀て必諫め居と觀て勧めへ
モ職うちと忘と果て俱か不善と勧むと君ふ縉らひ己と富く使ぬ
と。まわ あいさとう。あい ふかく あれ まき
の後か不處ふい。とふかく使用の屢うと府庫空き。民と虐げ食が
ほれ。と。まく うきと。まく まく まく
ほれ。と。まく うきと。まく まく まく
民の君のまほのや。下弊ゆまび上り弊を終ふす民と失ふす。自あ
ふれ。卑と捕へ人と逐下。裸役を免へる。民あ仁ふ感伏と。君
まくまく まくまく まくまく まくまく
上と拜むべ。唯今までのより今更まで仰詮す。今日より改め
ある。萬を万策の後まで。榮えあんむせす。と憚所あ。達け見べふ
光がん不變きりん。いまご左右の御ゆき犯ふ太蘭輩義太進と野阿佐翁の

う。ひまうらき。まがり まがり まがり まがり
郷の農民等上と蔑みて命令ふ應ぜば。ま不遜牙執ふきとを禁
めんと粉て來つて法あるとと示せん為あて。必不仁の而あふあくべ。まく君
ナジテ。まく まく まく まく まく まく
来性ゆ定うかぬ。賜一き帰女を家をあうよ。諸客と勧め托宴して
まくまく まく まく
功用不變の基とあると。殊勝ひうこきや。渠とみ素性の陋ークとど不快
あきうえ。まく まく まく まく まく まく
も窓を以て富貴と稟る恩ひもまた。争う君ふ托與と。勧めて初て是と共
や。まく。傍ふ侍る臣。君の美惡と國をふあ。然るて阿主縉ひて。俱か不善
く。まく。在下及びと。まく まく まく まく
あ。まく。あ非と。殊む才ひゆくと。争う君ふ不善と勧め。身と富さんと計へき。
りと。まく まく まく まく まく まく
言ふ所悉く。まく 在下等が身ふ罪すを。せしめられた言あり。吾們がうへ右
まく 左まく。阿主縉の小人どりと。曉ゆきて。傍をく。召せりとと言ひ入

言ふての意を詳さず。然ああくまやと音うへて。駿眼まよび雀郊沃婦
にとおへて太蘭性のへもと所を離す。安東刀耕へ賢者ありと農民们
私なり。君忠あらばとも是をえべし。ま事のあるとろんと輕られて
轍とま。眼はる奸智の腐約ども。云繫せにて非を飾て。賢良の君で
て。桀紂とまさんとて。弊きども君とまことをよ。災害臻るとかくさすと
か。ありま。いう。さひまとあ。びちう。き。めりま
歎き景勢うみぬる。唯今帝上つ。微忠と呼べた。容らる。と主君
の願とうら成る。忠心面ふ彰ひき。甘涙脩毛をむづり。ふ光体表ふ憲
へさまを。鷹鷹と更ふ決せば。畫下門あたり。声高やうふ。こまく近江阿佐
うち。急せ若ませし鷹。と竹の先ふ狹え。一封の書と指出せば。す處が在
けり供方の士急を告る。とひひて取てお来る。近習等の手ふ



あらよ迹うち吾とまち就て閉門の指揮を倣えんま行と准候させ。どりひ放
と矣へ今。隼人い矢とまち作び。歎息をまど今いをや力及ばぬ事とさう。
そ。乘輿の重複る陸天等い徳肩入き。走づめくふ北山の弟へ昇りをあたけ
も。と。集人の君と教まふ心ふをのまく與まつて一間入す。わともいをを居と
り。畢竟件の達進へ前半代が居らざりしより。是い花落へ徳する多え女子
でまく。物のや。吾们空を在んや。と戸毎の老の置置をあくべ形を繩小及
び。さう。ね生との文を寫ね

第十四

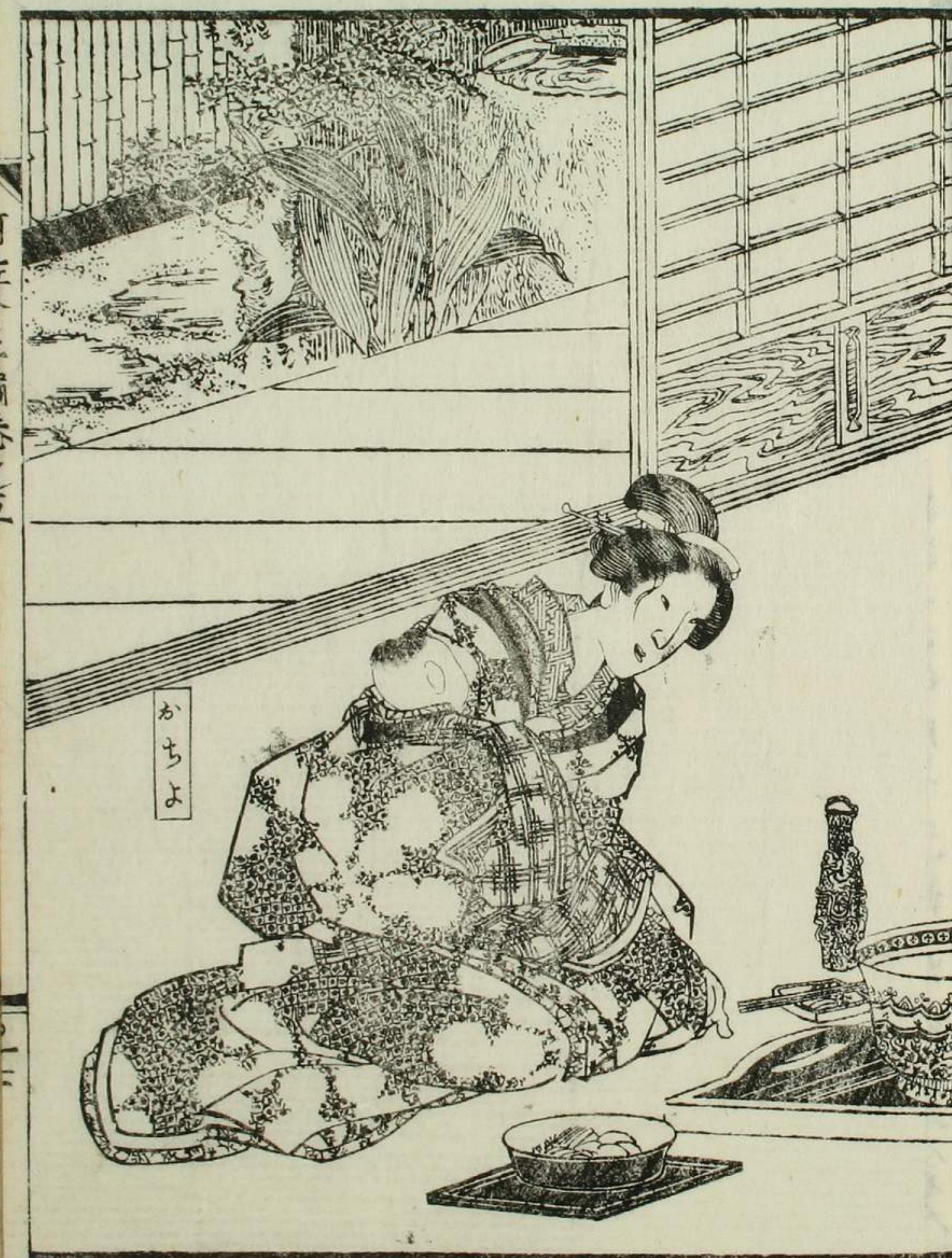
まつふ ちくぢ、えき
列婦の薄命艱難と嘗
めきびとめぢへんじう
岡毅木訥人心と感動ひ

あともと 以のから りゆべ
安東隼人が家隸某の主人ひき罪と做してかに答へど無らまへん。

狼狽發毛。辨へまく。あおがす。辛ひ。手あわぬ。と。鄙振。主
ども。白く。臭ち。やう。眼元。凍く。そむ。脣も。寒ね。一個の女。衣數。さす。見え
る。苦しみ。ね。肌ふ。二束。三束。やう。の。雅。老。脊骨。腰。布草鞋。廢
主。見。旅。け。の。老。年。喘。え。老。未。つ。妻。東。隼人。門。成。漢士。對。ひ。て
腰。屈。め。妻。在。洛。初。老。未。何。處。西。東。御。身。私。き。み。妻。東
さ。身。毛。身。也。と。内。息。づ。ひ。力。も。力。も。き。門。成。漢士。唯。琳。处。よ。所。用。あ。つ。彼
人。と。奪。終。來。う。妙。總。ど。も。刀。執。き。身。上の。首。尾。損。總。も。そ。熟。唇。の
か。今。閉。門。不。免。と。り。そ。そ。官。吏。格。處。山。瘦。れ。狼。狽。て。呵。い。も。と。
畢。ら。ぬ。法。協。國。内。十。人。中。の。組。み。と。ひ。き。連。と。門。衛。よ。ま。竹。の。准。体。う。あ。べ
と。出。せ。二。ふ。割。人。あ。廊。外。と。筵。と。と。動。ぬ。や。ふ。お。ゑ。を。と。あ。め。だ。と。

あらうえみうろく
はふ遠く女を漏もてす處うす人ふ妻ひ大きの教ひうゑと遙こ此處まを系
どりん ちる うる
てゆ。との門で這入て懐ひませぬれといえせも敢え。見る聲り表え。まく竹
くと達締め相手て此處へ這入き。又まくまく方の旅の形。仰處ま来てねの歌
ひ的吉利を以阿佐倉の農民们が娘るまん。教ひうあが此處かほむ。島内方
称ふりよ宣と己づ名云きて國內い着返す。もの用ひれ疾く吐せ。と權威不
募すそ角立眼ふ亮く鋭きが旅寢まの容ふくあまど衣縫ふも。多く年
々をせづゑ。もまちとぞ どことえよき。ととまきと まう。
ね敷ふ園内い忽地。玄葉と和らげ。向處ま竹の用で来。と隠ふ幼稚児を脊負て
さうち あら あら
きびれ まうい あら
肩も張うし足腰も。と草野と齋入る。安東のまづらの客で。持へ明ねが自らもまき。
うらうら こうちびと ようせん
甲斐刀称の内人その用向そりてよ筋ふ考え。取あげて教ひて懐へて遣さん。
を お お
わを身をこま とあつま
こころ あんとうあと。いまもあらうと。いまもあらうと。
と初めお齋す。猶核声。その若無い分など志する安東隼人。今眼も閉門の

とを。そのも。此の條はあらねども。急かに縛り果ね動靜さくべ頑ひのき條とりて取れんと主
意。す。持と居やえ然あと着て妾ひをいへば佐倉ある。元井戸皆若う渾家れん。年
代と呼むるふけう。この程課役のとて就泰山書を寫り宿吏の山本北月とそ
とて居を牽引す。よくせあわ遠き良人との頂に用金の才費をして美
濃付勢と西まうけを出る箇を盡れども。折角千両二両あらの
うち貰て是れ者ありても毎へ大金ふまび郷の長ふ面會せと僕坐して
調ひながら看る所が多まさ。元へ金の才覺らをきみとて。あお在れ
まき。てらる。せんねんさん充右う左まくふ入べき余外とたれと。又また年方年正とても多く調ひ。良人
の函生あらう。貸んとの人ある中不そく借金をす。その取て言ふ。かくべ官吏す。
まくはまきをせん。久主。ひつち。まきの不。を。じゆうあら。とまく。まき



。ふちよ も も まうまう あやめ かも まう
とん。於千代ハ胸の勝勝とて、若魚をまともとひ分だ。辞とくいを泰山の舟を
救ふゆのきらんれ。魚とびとそ今この人ふ身とほさんもあゆのゆく
をまうぶ
成れまろく。あらば泰山のあふ破3操。み惜とのじるとすて汚さまとそ其
もやうぶ
うひとき
えで成れせぬとそ此人せ。慈えと仕立余まで。歎とモさく益へう。三十六計匪
すじう
匪と上へ死。か逃う。身と一胸お沉めて。捕へらまくるをと歎へ。完示笑ひつ睨ふ
む
國內が敵とうち殺す。刀槍のまゝま殺す。心不深とて捨へ。身と附で
づく
この えんどうまへ こうち ま
わり思ひふ。右左のべき不滿ふ。あゝ殺ど泰山の殺をえぬうう。多難
え
あちか あちか
難の氣の氣流居ま。心も正焉ふ。帽の袖をあたけ。の枕並べて寝るとも其
す
あたと
情の氣。右左の危とらば。身ひのんまうく。あん身軽と行らひて。佐けのう。意下へ
え
え
是また御生半食人で。拾てあん身が宿の妻。と云ふ。もと
と
あ

を。お。お。お。お。お。
あらえ。先須家とすもちか。その因縁ふゆく。自發ひだ。枕をふ坐とあらそ。まはる
とき。また。ひどい。まよ。
と廻くほつ。一日も早くうち降す。殊みの頼む。ま欲く。もひきし。み國らば。今
ときち。ひ。
黄泉の鬼とき。非業死せり。身の上ゆ。効山刀樹の若き。ありと。せばうく。
せもゆきを帰る。かう堅田の殿遣す。在せ。万松が愁ふと。月と。も
うへん。ちゆき。わく。う。ト。ま
ん。の。愛ト忠良。まて。奸。せのちや。焼ふ。う。そ。汝が切き。むふ。伴さ。と。絶
とき。あ。ト。ト。さ。
不姿。著へせど。この世か。せと。隔。ア。そ。取く。於ゆ。云。や。だ。す。の。も。ひ。あ。う。う。う
え。
ちゆき。ま。を。あ。立。退。と。吾。た。う。そ。努。め。漂。蕩。と。ふ。在。と。た。い。身。み。禍。ひ。の。集
あ。う。お。立。去。よ。疾。く。ま。よ。と。ひ。れ。と。思。べ。苦。き。う。お。千。代。い。隊。す。の。足。列
さ。ホ。吾。お。も。あ。う。そ。反。祀。ひ。き。と。う。お。病。脣。く。お。お。そ。考。没。相。の。達。ま。を
き。
く。彼。わ。う。お。下。ち。の。障。子。の。外。お。軽。と。去。お。や。疾。ま。ご。お。と。う。い。ふ。も。お。禁。

報。耳ふ響や奉山の声。そもそも不列と楊柳。まもち坐てえをと教わり。特
やうひばんじう。あむねあ思へども教までもよふ。な
こがくしたやか夢幻泡。こましらひ林の看りさん。とくに思へども教までもよふ。な
あひと教ひて災害あらんをあめ。肺と腫と益ひ。心事多きの刻ふ任せ人の
えぬまみ立遅。今厨の方と窓へど下奴の曲突と焼さへす處か居らねば燒
く。今少く。まちまち。そどう。そどう。そどう。
侍と草鞋とさくも歟あへだ来アモ。今目的と手次れ此處へと剽アツヘの
やうひばんじう。
きく未玉ども。今夕あらきとまへと逃るとき。自悲かむ魂の身ふ副び密
か窓ああおき。門あ暴ふ噪うあ。訛る声とちり揚ては領うちう農民
ども。鄉の長うああをあう。ら科あつて石籠らきてぞ。支票取んと教ひみ出
す。渡りゆ人遍あらえ。この教ひと取上さへ素日かうとめの人数。門のき
ももと。まくらぐ。あべ。まくま。う

卒作天より常の権威へなれや失て注進みゆ考ゆあり。狼狽て逃るの
ゆあり左はたは小限難走す千代へ坐て懸母ノ也日来泰山が仁公の令草
を承り。僕一連て詔の罪を怖えぬの形入然と今親一子を出
ましを承る。僕一連て詔の罪を怖えぬの形入然と今親一子を出
実ふあうばんのほ意々水のうきよ。君情世ことを恨めけまとぞふゆ
御子にざら涙に手ふ拭ひにゆく。書ニ御と腹と拘き。この發動ふとも珍
き難い門と近坐す。畢竟とと等の強訴を做し。清かぬ行ゆ活説う
ある緯長けきべ編と嗣ぎ。第三編と大尾とくと一部の局と結ぶ。看友宣
く高評あつて他日の発市と俟ひんと販元脅きよ歎ふえ

忠勇阿佐倉日記第二編卷之五終

增清顧南原先生編選

隸辭

中全四冊

日本安藤龍淵先生増字

明清高入靄厓先生原摹

白紙摺

本

名家巾箱畫譜

帙八冊

矢野西洲先生著

從三位東久世竹亭公題辭

岡田良策先生編輯

大沼枕山先生明治

小野湖山先生文雅

龜谷省軒先生鄙人名錄

講義

全唐冊

梅陵井澤先生著

編輯

新言漢畫指南

山水文部二卷

人物花鳥之部二卷

画法画論二卷

近世名婦百人撰

岡田良策先生編輯

伊藤靜齋先生圖画

著者あり

明治十六年二月九日求版御届

書肆

大川錠吉

東京府平民

淺草區淺草三好町
七番地

大坂書肆

大坂本町四丁目

岡島真七

芝三島町

山中市兵衛

浅草廣小路

吉田久兵衛

横山町四丁目

过岡文助

日本橋

通三丁目

跡左門町

小林鉄次郎

淺草新福井町

高梨彌三郎

五番地

同三好町

七番地

大川錠吉

東京書肆

